

「新二世」のトランスナショナル・アイデンティティと  
メディアの役割  
—米国・英国在住の若者の調査から—

The Transnational Identity of New Second Generation Migrants and  
the Role of Media: A Case Study of Young People in New York City  
and London

藤田結子\*  
Yuiko Fujita

**Abstract**

The objective of this study is to explore how electronic media influences the construction of transnational identity. In recent years, increasingly more people have begun to move back and forth between two or more countries and to connect transnationally using satellite television and the Internet. It is discussed that as a result, migrants begin to construct new transnational identities, and the identity of the “new second generation” is often the focus of attention. Therefore, I have conducted a case study of young second generation Japanese in New York City and London in order to explore the influence of electronic media on identity construction.

The results show that there are three identification patterns among the young people: (1) Japanese, (2) national identity other than Japanese, and (3) transnational identity. The process of their identification is affected by specific factors: parents, language, race and ethnic relations, and back-and-forth movement.

As for electronic media, the Internet has greatly influenced the young people’s identity negotiation. After the Internet became available to them, the young people began to watch Japanese television programs far more frequently than they had previously watched them, by using free video-sharing services such as YouTube and Veoh. They also began to develop networks with other young second generation Japanese around the world by using social networking services such as mixi or Facebook. These electronic media enable them to negotiate their identities by “thinking across spaces.”

In conclusion, electronic media leads some of the young people whose parents are of different nationalities and who were brought up in more than two countries to form new transnational identities. These young people use electronic media as a means of constructing new identities to transcend their national identity, which tends to emphasize cultural and ethnic homogeneity.

---

\* 明治大学商学部准教授、Associate Professor, Faculty of Commerce, Meiji University  
E-mail: yfujita@meiji.ac.jp

## I. 問題の設定

### 1. トランスナショナル・アイデンティティをめぐる議論

1990年代以降、さまざまな学問領域でトランスナショナリズム研究が活発になっている。Linda G. Baschら（1994）は、トランスナショナリズムを「移住者が送出国と受入国をつなぐ多様な社会関係を創出し維持する過程」と定義し、グローバルな資本主義システムの発展が主要因となって国際移動が活発化し、多くの人々が2国またはそれ以上の国々に渡る越境的な社会空間で生活するようになったと述べている<sup>1</sup>。具体的には、移住者やその子供が2国間を行き来する、2ヶ国語を話す、母国へ送金をする、母国の組織に所属するというような活動を指している（Kasinitz et al 2002）。

このようなトランスナショナリズム的傾向は、受け入れ国で育った二世以降よりも、母国出身の一世に強いといわれている（Vertovec 2001: 577）。この越境的な社会関係は、(1) 母国への感情的なアタッチメント、(2) 受入社会での周辺化、(3) 経済的要因によって生じると説明されてきた。つまり、ホスト社会への同化がうまく進まないこと、出稼ぎが目的の移住であることなどによって越境的な社会関係が起きるとみなされ、出身国を志向するトランスナショナリズムと受け入れ国を志向する同化は二律背反するものだと捉えられていた（大井 2007）。しかし最近では、トランスナショナルなつながりを維持しながらも、ホスト社会に適応するという側面にも注目が集まるようになってきているという（南川 2007a）。

トランスナショナリズム研究が盛んになるにつれ、このような移住者のアイデンティティに大きな関心が寄せられるようになった。これまで社会科学では文化やアイデンティティは地理的な場所に結びつけられる傾向にあった。たとえば、アメリカ合衆国という場所にはアメリカ文化があり、「アメリカ人」としてのアイデンティティを抱く人々がいるという前提で考えられていた。しかし、これでは上記のような現象を分析するうえで限界があり、新たな分析枠組が必要となったのである（Gupta and Ferguson 1997）。

こうして「トランスナショナル・アイデンティティ（transnational identity）」という語が多くの研究で用いられるようになったのだが、この語が意味するものは研究によってさまざまであり共通の定義はみられない。移住者を対象とした研究に限れば、2つまたはそれ以上のネイション<sup>2</sup>に「故郷（home<sup>3</sup>）」を持つことから生じる多元的・多層的な意識を指すことが多い<sup>4</sup>。Mary C. Waters（1999: 90）が指摘するように、「トランスナショナル・アイデンティティ」は、移住者が母国と受け入れ国を行き来しつつも、A地点からB地点へと変化していくアイデンティティではない。むしろ、個人や両方の社会を変化させるような仕方で社会や国民国家を越えるのである。これは、個人は複数のアイデンティティを持ち、階級やジェンダーなどの属性によって異なる移住経験をするという点で、ポストモダン思想の影響を受けている。

そして、とくに1965年の米国移民法改正以降の「新二世（new second generation）」のアイデンティティに大きな関心が寄せられている（Portes and Rumbaut 2001; Levitt and Waters 2002;

<sup>1</sup> このトランスナショナリズムという現象の「新しさ」に関する批判については小井戸（2005）、村井（2007）を参照。

<sup>2</sup> 田辺俊介（2010: 15）が指摘するように「ナショナル・アイデンティティ」を定義づけるための基礎概念「ネイション」自体に研究者間で一致した定義が皆無である。本稿では、「ネイション」は日本語の「国民」「民族」「国家」に相当する概念として用い、「国民」の語は国民の意味に限定する場合に用いる。

<sup>3</sup> 独語「heimat」（ハイマート）に由来する「home」の概念。

<sup>4</sup> 他方、国際関係論やジャーナリズム研究では、政治、経済、イデオロギー、宗教などにもとづく国境を越える共同体への帰属意識（例：EU、環境団体、イスラム世界）などを意味することが多い。

Kasinitz et al 2008)。これらの研究において、「新二世」は、少なくとも1人の親が米国生まれである人々、および本人が12歳頃までに米国にやって来た人々（すなわち「1.5世<sup>5</sup>」を含む）を指す（Levitt and Waters 2002: 12; Kasinitz et al 2008: 1）。このような「新二世」には、母国と受入国を頻繁に行き来し、2国で交互に教育を受ける者がある。さらにインターネットや国際電話を利用し国外に在住する家族・親戚と連絡を取り続けている。その結果、少なからぬ人々が、1つのネイションへの帰属意識を超えるアイデンティティを構築しているのではないかと議論されているのだ。なぜこのような議論がなされているのかといえば、将来的に「新二世」が「アメリカ人」としてのアイデンティティを抱かない、米国への愛国心を抱かないことが危惧されているからである。

## 2. 電子メディアの役割

そして、トランスナショナルなアイデンティティの構築には、電子メディアが重要な役割を果たすと言われている。もちろん、Vertovec (2001: 577) が指摘するように、コミュニケーション技術の発達がトランスナショナル・アイデンティティやネットワーク形成の原因になったというのではなく、その形成を促したと考えるべきであろう。

このようなメディアとアイデンティティに関する議論は、Benedict Andersonのよく知られた『想像の共同体』（1983＝1997）に基づいている。過去には、新聞や小説などの印刷メディアの普及によって、同じ言語を話す人々が会ったこともない同胞を1つのネイションとして想像することが可能になり、国民国家という形式の普及が促された。さらに彼は、コミュニケーション技術の発達により、「遠隔地ナショナリズム」が出現したことを指摘する。移住者たちは国際電話やFAXなど以前では考えられなかったような方法で同胞とつながり、メディアを通して寸時の距離に存在するようになった母国を想像する。この状況を考えれば、ナショナリズムが時代遅れなものになったとはとうてい言いえないというのである（Anderson 1992＝1993）。

他方、Arjun Appadurai (1996＝2004) は、「想像の共同体」から着想を得つつも、異なる見解を述べている。彼によると、テレビ、ビデオ、コンピューターなどの電子メディアが世界中で普及し、人々はメディアが運ぶ大量の映像に日々晒されるようになった。これにより、世界中で数多くの人々が、生まれた場所から移動して働いたり暮らしたりすることを日常的に想像するようになった。同時に、電子メディアを通して、国境を越えて、製作者とオーディエンスがますます結びつきを強め、さらにオーディエンス自身が移住する者と留まる者の間で「対話」を始めた。その結果、多数の「ディアスポラの公共圏（diasporic public spheres）」が出現しているというのである（Appadurai 1996＝2004）。

不特定多数の人々によって織りなされる言説の空間という意味での公共圏は、排他的かつ必然的にナショナルな境界をもつとこれまで考えられていた。だが、イスラム世界や環境NGOのネットワークに例示されるように、電子メディアの普及によって公共圏がナショナルなものであると前提可能な時代が終焉を迎えている。さらにAppaduraiは、このような電子メディアと国際移動の相乗効果によって、しだいに国民国家は時代遅れのものとなり、「ポストナショナル」なアイデンティティや政治形態への希求が高まっていく可能性を指摘する。

このような議論を受けて、2000年代以降、英国を中心に、電子メディアとアイデンティティに関する数多くの調査が行われるようになった。英国においても、旧植民地との関わりから、近年の新しい二世とそれ以降の世代のナショナル・アイデンティティへの関心が非常に高いか

<sup>5</sup> 1.5世（1.5 generation）とは、一般的に12歳頃までにホスト国に移住し、ホスト国で育った人々を指す。

らである。これらの調査は共通して、世界各地の移住者やその子供たちが、テレビやインターネットなどを利用し、複数の文化や場所に関わるアイデンティティを創出している状況を報告している<sup>6</sup> (Karim 2003; Block and Buckingham 2007; Bailey et al 2007)。

とくにKevin Robins and Asu Aksoy (2001) のトルコ系キプロス人を対象とした調査は、Appaduraiの議論が現実のものとなりつつあることを示している。調査参加者のうち若い二世・三世の女性数名は、生まれ育った英国の文化に適應していたが、英語にくわえてトルコ語も話すことができる。1990年代に英国でトルコからの衛星テレビ放送が開始されると、彼女たちはトルコ製番組を視聴し始めた。その結果、トルコの文化や人々について理解を深め、自己の「トルコ人らしさ」をより肯定的に捉えるようになった。さらに、メディアが構築する英国およびトルコの文化的空間を自由に越境し始め、トルコ、キプロス、英国の間に生きる存在としての自己を想像するようになったという。Robins and Aksoy は、彼女たちの経験や意識はナショナル・アイデンティティという「箱」に収めることができない、と論じている。

上記のように相反する傾向が観察されるのは、グローバリゼーションは複合的現象であるからだといえるだろう。Anthony Giddens (1999=2001: 34) が指摘するように、一方では地域的ナショナリズムの台頭を誘いつつ「想像の共同体」への愛着を強め、他方では在来型の国民国家の縛りを緩めるのである。では、この世界中で複雑に構築されつつあるメディア・ランドスケープとトランス／ナショナルなアイデンティティは、日本というネーションをめぐってどのように展開しているのだろうか。

### 3. 日本出身の移住者のケース

日本出身の移住者は南北アメリカを中心に世界各地に広がり、各国・地域によって状況が異なっている。ここでは調査対象とする米国・英国の場合について検討したい。まず先行研究は、日本で生まれ育った後に移住した日系一世や長期滞在者は「日本人」としてのアイデンティティを保つ傾向が強い、と結論づけてきた。個々の事例を見てみると、明治・大正期に米国や英国に移住した一世の場合、その大半が「日本人」としての意識を抱き続けていた<sup>7</sup> (Takaki 1989; Itoh 2001; ベフ2002)。近年の永住者・長期滞在者も、「日本人」であることにこだわる傾向が強い。たとえば米英の駐在員とその妻・海外子女は日本に呼び戻された後のキャリアや教育のために、習慣・言語・外見上の「日本人らしさ」を保持・獲得しようと努める (町村1998; Sakai 2000; Kurotani 2005)。その一方で、キャリアや文化的志向により米英に移住する女性たちは「日本人らしさ」を超える新しいアイデンティティを探そうと試みる。だが、結局はホスト社会の人種・民族の序列の下位に置かれてしまうため、「日本人」以外のアイデンティティを自由に選択することは難しい (Sakai 2000; Fujita 2009)。

つぎに二世・三世以降の人々であるが、米国の場合<sup>8</sup>、ホスト社会のエスニック・グループへ

<sup>6</sup> このような電子メディアの利用を通して行われるアイデンティフィケーションは、Stuart Hall (1996: 2) が指摘するように、常に「進行中」のプロセスである。しかしその過程は様ではなく、世代、年齢、社会階層、ジェンダー、エスニシティ、宗教などの要因が複雑に交差し、メディアの選択やアイデンティティの構築に影響を与えている。

<sup>7</sup> 米国の場合、多数の日本人がハワイや西海岸に渡った。一世たちはアメリカが自分の国だと信じつつも、1952年に移民帰化法が制定されるまで「帰化不能外国人」とされ、「日本人」として生きるほか選択肢がなかった (Takaki 1989: 212; ベフ2002: 234)。英国に関する先行研究は少ないが、イギリス人の配偶者を得た移民も、「日本人」としての強いアイデンティティを持ち続けていたという事例が報告されている (Itoh 2001: 108)。

<sup>8</sup> 英国の場合、二世以降の「British Japanese」のアイデンティティについては、特定の傾向を明らかにするような社会学的研究の蓄積はみられない。

の帰属意識に基づく Japanese American としてのアイデンティティを抱くようになる (Fugita and O'Brien 1991)。今日では、米国にくわえ、カナダ、ブラジル、ペルーなどのアメリカ大陸の国々の日系人のあいだで、日本という共通の出自に応じたトランスナショナルな結びつきを確認しようとする動きも活発になっている。しかし多くの日系人にとって、Nikkei というトランスナショナルなアイデンティティは日系人がホスト社会に統合したことを前提として成立しており、相互のナショナルな境界線を越えた1次的なアイデンティティとはなっていない (南川 2007b)。

電子メディアの影響に関しては、日系一世、永住者、駐在員、海外子女などを対象に調査が行われてきた。その結果、日本製テレビ番組やビデオの視聴は、「日本人」としてのアイデンティティの再交渉を促すことが明らかになっている (藤田 2004; Kondo 2005; Kim 2010)。たとえば、日本で生まれ育った後にニューヨークやロンドンに移り住んだ20代～30代の「長期滞在者」「永住者」を対象とした調査では、若者たちは、2国間を頻繁に行き来し、日常的に日本製テレビ番組やインターネットを利用し国境を越えて日本とつながり続けていた。それにもかかわらず、トランスナショナルな意識を抱くようにはならず、むしろ日本への帰属意識を強める傾向が明らかになった (藤田 2007, 2008)。

このように先行研究は、日本出身の移住者のアイデンティティおよびメディアの影響に関する知見をもたらしてきた。だが「新二世」のアイデンティティに関しては、まだ先行研究の蓄積がみられない。

以上のことから、本稿は、トランスナショナル・アイデンティティと電子メディアをめぐる議論を、日本出身の親を持つ「新二世」の語りから考察することを目的とする。「電子メディアは、トランスナショナルなアイデンティティの構築にどのように影響を与えるのか」という研究の問いを設定し、以下で検討していきたい。

## II. 調査方法

考察のために、日本出身の親を持ち、ニューヨークまたはロンドンに居住する「新二世」を選定した。在留邦人数は、2008年の時点でニューヨークが4万9,659人で第2位、ロンドンが2万7,072人で第5位と (外務省2009)、日本出身の人々が比較的多く調査地に適していると考えた。また、上記の、同都市における若者を対象とした調査結果と比較する目的もある。

現地の「新二世」の若者の社会的ネットワークによるスノーボール・サンプリングを用いて、調査参加者を集めた。上記の Kasnitz (2008: 1) の「新二世」の定義に習い、少なくとも1人の親が米国か英国生まれである者、および自身が12歳頃までに米国か英国に移住した者に調査への参加を依頼した。したがって、両親ともに日本人の者にくわえ、一方の親が日本人でも一方の親がほかの国 (中国、スリランカ、米国、英国、ドイツ) 出身の者が含まれる。この「新二世」たちの年齢は20代～30代前半、女性5人・男性4人である。全員が大学に在学中あるいは卒業しており、調査時の職業は学生、会社員、専門職などであった。したがって、全体的に高学歴のミドルクラス層の若者となっている。

この調査参加者の人数は9名と多くはないが、日本出身の親を持つ「新二世」の若者は少数であり、かつ地理的に分散していて該当者をリクルートすることが困難である。さらに先行研究の蓄積がないことから、今回のような新しい試みの調査の目的には十分だと考える。

2008年から2009年にかけて、ニューヨークまたはロンドンのカフェなどで、各人2時間程度

インタビューを行い、家族関係や生い立ちなどのライフストーリーと、調査時点でのアイデンティティや人間関係、故郷に対する意識、メディア利用などについて語ってもらった<sup>9</sup>。

言語については、語り手にとっての話しやすさを重視し、インタビュー時に語り手が自発的に話した言語をそのまま使用した。英語での会話も、後述のように、和訳せずに原文のまま本文中に引用することとした。なぜなら、特定の言語の使用自体が、個人の文化的経験やアイデンティティを浮き彫りにするからである。

本稿は、桜井厚（2002）のいう「対話的構築主義アプローチ」の立場からインタビューという調査方法を捉える。語り手全員が、その生い立ちのために、普段から自分のアイデンティティについてよく考えると述べていた。それでも、筆者がインタビューという場を設けて、「あなたは誰なのか」「どのような人生を歩んできたのか」という問いをあらためて投げかけるこのインタビューこそが、彼ら彼女らのアイデンティティやライフストーリーを構築する「文化的営為の場」であったと考える<sup>10</sup>。

### III. 調査結果

#### 1. 「新二世」のアイデンティティ

まず、「新二世」のアイデンティティに関する語りを見ていきたい。この若者たちの意識は「日本人」「日本人以外の国民」「トランスナショナル・アイデンティティ」という3つのカテゴリーに分類することができる<sup>11</sup>。

##### (1) 日本人

両親ともに日本出身の日本人である男女Aさん、Bさん、Cさんは、幼年期から英国で育った、日英バイリンガルである。義務・高等教育を英国で受け、人生の大半を現地で過ごしていても、「日本人」としてのアイデンティティを抱いている。たとえばAさんの場合、普段から自身のことを「ジャパニーズだけどイギリス育ちの日本人」と表現し、「基本的に見た目も日本人で、やっぱりちょっと日本人の部分のほうが強い<sup>12</sup>」ことをその理由にあげている。

##### (2) 日本人以外の国民

一方の親が日本、もう一方の親がほかの国出身である者のうち、LさんとMさんは、後者の親の母国の国民としてのアイデンティティを抱いている。白人のイギリス人を父親に持つ男性Lさんの場合、英国で生まれ育ち、英語を第1言語としている。彼は躊躇することなく「I just always feel as being British, really」と述べるように、自分自身を「British」であると考えている。家庭内での使用言語も英語であり、「I never really thought of myself as being half-Japanese until I

<sup>9</sup> インタビュー同意書に記入してもらい、許可を得て会話をICレコーダーに録音した。インタビュー内容すべてを書き起こし、コード化して分析した。この若者たちのディアスポラの経験は個人が特定されやすいことから、詳細なプロフィールは省いた。

<sup>10</sup> インタビュー・ガイドを用いつつ、それぞれの話に応じて新たな質問をし、意見を求められたときは考えを述べた。したがって、インタビュアーである「私」の属性や経験も、語りを生成する相互行為に影響を与えたと考える。

<sup>11</sup> 残りの1人は、この3つのアイデンティティとは異なる意識を抱いていたが、字数の制約上、本稿では割愛する。

<sup>12</sup> Aさん、男性、20代後半、会社員。インタビュー実施日は2008年3月1日。

went to Japan<sup>13</sup>」と、大学時代に日本への交換留学を経験するまで、自分自身の「日本人らしさ」をほとんど意識したことがなかったという。

### (3) トランスナショナル・アイデンティティ

一方の親が日本、もう一方の親がほかの国出身である者のうち、Rさん、Sさん、Tさんは、1つのネーションへの帰属意識を超えるアイデンティティを抱いている。この3人はみな女性で、子供の頃から2つまたはそれ以上の国で暮らした経験を持つ。だが彼女たちのアイデンティティのあり方は一様ではない。

Rさんの場合、父親が白人の英国人であり、日本と英国で交互に教育を受けた、日英バイリンガルである。「私は日本にいるときは日本人、こっちにいる自分はイギリス人って考えたいですね」と場所に応じてアイデンティティをスイッチするという。「両方住んでいたっていうのもありますけれども、どっちも外国人っていうのが嫌なんで<sup>14</sup>」という話からわかるように、両方の国民から「排除」されることを回避するアイデンティティ戦略を採っているのである。

Rさんはいわば2つの国民共同体に帰属意識を有しており、彼女の場合、「複合的 (multiple) アイデンティティを抱いている」と言うこともできるだろう。

他方、SさんとTさんは明確な帰属意識を表明しない。Sさんの場合、父親が白人のアメリカ人で、幼少期から日本と米国で交互に生活し教育を受けてきた日英バイリンガルである。彼女は、典型的な「日本人」「アメリカ人」に対して違和感を持ち、自分自身とは一致しないと感じている。そのため、以下の話のように、ナショナルなカテゴリーで自己を表現することに葛藤を抱いている。

結局、1つの国籍で生まれた人の方が多から、そういうふうにカテゴリーしがちなんですよ、周りが。でもうちらとしては、「じゃあパパとママどっちを選ぶの」と言われるみたいなのを感じる。「じゃあ日本人なの、アメリカ人なの」とか、.....何かそういうセンシティブなことを言われると、「何で選ばなきゃいけないの」とか思っちゃう。やっぱりどっちもがいいけど、どっちつかずというか。<sup>15</sup> (以降の傍点・斜体は筆者による)

Tさんの場合、父親がスリランカ出身であり、日本で生まれ、日本を含む4ヶ国で育った。義務教育期から英国に暮らし、第1言語は英語である。非常にディアスポラ的な生い立ちの彼女は、子供の頃に深刻な「identity crisis」を経験した。現在は英国のパスポートを得ているが、「half-Sri Lankan, half-Japanese」である自分自身を典型的な「British」だと思えないという。いつの頃からかTさんは、Sさんと同様、「〇〇国民」というアイデンティティを「選ばない」という戦略を取り始め、そうすることで気持ちが楽になったと語る。

I always felt that I had to *choose* (a national identity). And then as I got older, I realized I didn't have to *choose* (a national identity).<sup>16</sup>

このように、同様に日本出身の日本人を親に持つ「新二世」であっても、異なるアイデンテ

<sup>13</sup> Lさん、男性、20代後半、会社員。同2008年2月27日。

<sup>14</sup> Rさん、女性、30代前半、会社員。同2008年2月25日。

<sup>15</sup> Sさん、女性、20代後半、会社員。同2009年3月27日。

<sup>16</sup> Tさん、女性、30代前半、専門職。同2008年2月26日。

ィティを抱いている。とくにトランスナショナルな意識のあり方は、三者三様であった<sup>17</sup>。

## 2. アイデンティティ構築に関わる要因

では、なぜ同じ日本出身の親を持つ「新二世」の若者の間で、異なる帰属意識が形成されるのであろうか。先行研究は、トランス／ナショナルなアイデンティティの構築に影響を与える複数の要因を指摘しているが (Robins and Aksoy 2001; Levitt and Waters 2002ほか)、そのうち、本調査では次の要因の影響が示された。

### (1) 親

本調査において、アイデンティティを左右する最も重要な要因の1つは、親のナショナルな属性である。なぜなら、1つのネーションへの帰属を超える意識を持つRさん、Sさん、Tさんの場合、共通して、一方の親 (母親) が日本出身、もう一方の親 (父親) がほかの国出身である。

他方、自分自身を「日本人」だと考えるAさん、Bさん、Cさんは、両親ともに日本出身の日本人である。Bさんの場合、2歳から英国で育ち、それ以後日本に長期間在住した経験がない。英国の永住権を取得しているので、法的にイギリス国民になる選択肢もある。だが彼女の両親が最近日本に帰国し、「家族がこっちにいないっていうのがちょっと寂しくなってきた」ので、「結局 (自分は) 日本人なので、最終的にはいつになるかわからないんですけど、たぶん日本に帰る<sup>18</sup>」と考えている。これまで暮らしたことのない日本に、将来的に「帰国」する予定を立てているのである。

### (2) 言語

もう1つの最重要因は言語である。一方の親が日本出身であり、もう一方の親がほかの国出身である若者のうち、トランスナショナルなアイデンティティを抱くRさん、Sさん、Tさんは、(2ヶ国語の能力には差があるが) 日英バイリンガルである。他方、日本人以外の国民としてのアイデンティティを持つLさんとMさんは、日本語をほとんど話すことができない。上記のRobins and Aksoy (2001) の研究においても、2ヶ国語の能力が重要であると指摘されていたが、本調査でも同様の傾向が示された。

### (3) 人種・民族関係

まず「白人」として「パッシング (passing)」可能な外見を持つ者は、人種的特権を有する白人と自己同一化しやすい。たとえば、Mさんは「I could easily say I am fully-European and people will believe me easily<sup>19</sup>」と、周囲から完全に「European」だと見なされるので自分を日本人だと思え難いという。欧米では、日本人であるよりも、(暗に白人を意味する)「アメリカ人」や「イギリス人」であるほうが特権を享受できるが、それは周囲からの承認が必要なのである。

つぎに、トランスナショナルなアイデンティティを抱く女性たちは、共通して、どの国民国家においても国民の (エスニック・マジョリティの) 一員と周囲から見なされてこなかった経験を持つ。Rさんの場合、「最近ではみんな (が自分のことを) 『たぶん、スペイン人』とかよく言

<sup>17</sup> 1つのネーションへの帰属意識を超えるということから、本稿では暫定的にこれらをトランスナショナル・アイデンティティとしたい。だがこの概念は、具体的にどのような意識を指すのか、何をもち「トランスナショナル」とみなすのか、十分に検討されないまま曖昧に用いられてきた。今後、これらの点をより慎重に議論していく必要があるだろう。

<sup>18</sup> Bさん、女性、20代前半、学生。同2008年2月25日。

<sup>19</sup> Mさん、女性、30代前半、フリーランス。同2008年2月29日。



う」と語るように、その外見が「イギリス人」としてパスしないこともままあるという。

同様に、彼女たちは、日本においても「日本人」としてパスしない。たとえば、SさんとTさんは日本人とみなされない疎外感と特権について次のように語った。

「ハーフってかわいいよね」とかいろいろ言われて、得かと思うけど。でも私はそこ（日本）で生まれたわけだし、生まれた所でやっぱり「ガイジン、ガイジン」と言われちゃうわけだから。（白人のアメリカ人の）父親とは違うわけじゃないですか。（父親のように自発的に来日し暮らして）by choiceで目立っているわけじゃない。

Every time I go back (to Japan), I feel that (I have more freedom). Maybe because I think a lot of people don't see me as Japanese, so I'm an outsider (as the normal stringent social rules don't apply to me).

これらの語りが示すように、「人種」的・文化的な同質性を前提とするナショナル・アイデンティティに抑圧されてきた経験を通して、トランスナショナルな意識の形成が促されるといえるだろう。

#### (4) 2国間の移動

トランスナショナルリズムに不可欠な要素として、2つあるいはそれ以上の国の行き来が指摘されているが、本調査においても、全員が短期間または長期間（数ヶ月～10年以上）日本で暮らした経験を有し、少なくとも数年に1度は日本とほかの国を行き来していた。とくにトランスナショナルなアイデンティティを抱くRさん、Sさん、Tさんは、子供の頃から2ヶ国またはそれ以上の国において義務教育を受け、家族とともに暮らした経験を有している。彼女たちは10代のときに育った場所を「故郷」だと考えるが、その国と国民としてのアイデンティティは必ずしも結びつかない。たとえば、父親がスリランカ出身、母親が日本出身のTさんは、20年ほど在住している英国が「home」だと思っているが、自分自身をいわゆる「British」だと考えていない<sup>20</sup>。

### 3. 電子メディアの影響

#### (1) 衛星テレビ放送、ビデオ・DVD

では、「新二世」たちのアイデンティティ構築に、電子メディアはどのように影響を与えているのだろうか。まず、数名は1980年代に普及したビデオ、90年代に普及した衛星テレビ放送やDVDを利用し、以前から日本製テレビ番組を頻繁に視聴していた。Bさんの場合、2歳から英国で育ったが、自分を「日本人」だと思っている。彼女は、子供の頃から、日本にいる祖父から送られてきたビデオテープや、両親が契約していた日本語衛星放送JSTVをよく利用してきた。このような日本製アニメやドラマを通して「日本らしさ」を知るといえる。

<sup>20</sup> 以上の要因にくわえ、ジェンダーも影響を及ぼしている可能性がある。なぜなら、このRさん、Sさん、Tさんはみな女性だからである。その場合、女性は、男性を基準とする国民というカテゴリーから排除されやすいため、そのような意識を抱きやすいのではないかと推測されるが、本調査では分析することができない。また、先行研究が指摘する要因のうち、「政治へのコミットメント」「組織的活動」「出身国への送金」などの行為は見られなかった。

何かほんとに日本って遊びに行く場所なんですよ、私にとっては。ずっとこっち（イギリス）にいて。日本のドラマの世界で学校とかあるじゃないですか。ほんと未知な世界なんです。だからほんと日本に帰るとドラマの世界に入った感じ。……（日本では）文化祭があったりみんなでやる活動が多いじゃないですか。……ワーって楽しくやっているのがすごくうらやましく思いますね。

Bさんは、親や日本との行き来という要因にくわえ、このようなメディアの利用を通して、ナショナルな共同体を想像し、日本への帰属意識を形成している。

他方、Tさんの場合、電子メディアは異なる影響を与えている。彼女は、学生時代にロンドンの日系書店でアルバイトをしていた頃、店のレンタル用DVDをよく視聴していた。日本製のバラエティやドラマを見ることで、幼い頃暮らした日本への「ノスタルジック」な欲望が喚起されたという。

I like Smap × Smap. I just think it's really, really funny, yeah. I feel *nostalgic* because when I was living in Japan, I used to watch a lot of TV. That's how I learned my Japanese. So, it reminds me of when I was living there with my grandparents.

その一方で彼女は、「TV tends to make life in Japan look so much nicer and simpler」と、テレビ番組が描く日本は「現実」より理想的で単純化されている傾向を指摘する。つまり、この文化的空間が仮想的なものであることを想起しているのだ。Aksoy and Robins (2000) によれば、どの文化からも疎遠であるという感覚があるからこそ、「空間を横断して思考すること」(thinking across spaces) が可能になるという。そうであれば、電子メディアは、日本への欲望を喚起すると同時に、心的な距離を再認識させることで、彼女にトランスナショナルな意識の形成を促しているといえるだろう。

## (2) インターネット

本調査の「新二世」たちが最もよく利用しているメディアは、90年代半ば以降に広く普及したインターネットである。コストと手間がかかるという理由から、衛星テレビ放送やDVDを用いて日本のテレビ番組をほとんど視聴することがなかった語り手たちも、無料動画サービスを用いて現在流行のドラマ、お笑い番組、格闘技など多様なジャンルを熱心に視聴するようになったという。

父親が英国出身のRさんの場合、11歳まで日本で育ち、当時はテレビでアニメをよく見ていた。英国在住の現在は、YouTubeやVeohなどの動画サービスを利用し始めて以来、日本のアニメを「あいうえお順に全部見た」というほどノスタルジックな欲望を満たす快楽を味わっている。しかし同時に、「もちろん私が見ている日本のメディアっていうのは、結構偏っているかもしれないですね。……それが日本の社会の基準になるかっていうのはわからないですね」と、Tさんと同様、想像上の母国と「現実」は異なると考える。

さらにRさんは、新聞社が運営する女性向け掲示板（BBS）における家族や仕事の悩みに興味を持っている。「やっぱり自分に日本人っぽい考え方があるので」と女性たちの投稿を読むことで自分の「日本人らしさ」を再確認する一方で、「発言小町とかを見てると、（日本には）いじめとかに対してやっぱりされる者に非があるに違いないっていう考え方（がある）」と「カルチャーギャップ」も感じるという。

このように、インターネットが普及した後、日本とのつながりを再認識・再発見する機会は大幅に増えた。日常的に、ヴァーチャルに、「日本的な」空間と現在暮らす英国の空間を越境できるようになったのである。Rさんは英国に移住後2回日本に戻っており、この物理的な移動ももちろん重要である。だが、日常的にナショナルな文化的空間を越えて思考することは、インターネットの利用なしには不可能であっただろう。彼女の場合、電子メディアの利用は、「ナショナルなもの」への帰属意識ではなく、精神的に英国と日本を行き来するような、トランスナショナル・アイデンティティの構築を促している。

さらにEメールやソーシャル・ネットワークキング・サービス（SNS）が、この若者たちの意識に大きな変化をもたらした。以前日本に帰国した友人たちはせいぜい「何回か手紙を書いたくらい」で連絡が途絶えてしまっていたが、インターネットが広く普及した90年代後半以降に知り合った友人とは、帰国後もつながり続けることができるという。

とくにSNSは、日本にルーツを持つ「新二世」の若者たちが、同胞と結びつく空間となっている。語り手全員がmixiやFacebookを利用し、日本出身で子供の頃に海外に移住した若者のコミュニティ、あるいは世界各地にいる「half-Japanese」が参加するコミュニティなどに加わっている。たとえばTさんは、「I found that (in SNS) there are actually a lot of like half-Japanese, half-Chinese, you know, “half”」と、そこで自分自身と似た外見の若者が互いに知り合い、社会的ネットワークを広げたり、悩みを共有したりしていると述べる。同様に、Rさんも次のように語る。

mixiに登録すると、やっぱり同じようにバイリンガルで、日本（の学校）で、現地校で教育を受けた人とか、何かそういう（自分と似たバックグラウンドの若者たちと）理解しあうところもある。・・・以前だとイギリスに住んでいると、日本のことなんて、情報なんて手に入らなかったですし、ネットの前は。

このように、衛星放送や動画サービスを利用してヴァーチャルに2国間を行き来し、さらにコンピューターを介したコミュニケーションを通して世界の同胞とつながっている。Appaduraiが論じるように、電子メディアを通して、国境を越えて製作者とオーディエンスがますます結びつきを強め、さらにオーディエンス自身が移住する者と留まる者の間で「対話」をしている。実際に、「新二世」の若者たちによる「ディアスポラの公共圏」が出現しつつあるといえる。

しかし、それが必ずしもトランスナショナルな意識の形成に結びつくわけではない。以上に見てきたように、本調査において、トランスナショナルなアイデンティティを表明していたのは一部の者のみであった。残りの者は電子メディアを通して、むしろ過去の移住者がそうしたように、1つのナショナルな共同体への帰属を想像していたのである。

#### IV. 結論

上記の調査結果から、「電子メディアは、トランスナショナルなアイデンティティの構築にどのように影響を与えるのか」という研究の問いに答えたい。

結論として、「新二世」の若者の語りから、電子メディアは、ほかの諸要因と重層的に関係しつつ、トランスナショナル・アイデンティティの構築を促すことが示された。これは、両親の出身国が異なりかつ複数の国で育ったというような、もともとディアスポラ的な経験が高い者

にのみ見られた影響であった。彼女たちにとって、電子メディアは、同質性を前提とするナショナル・アイデンティティの抑圧から解放され、新しいアイデンティティを創出するための1つの手段となっていた。

一方で、電子メディアは、両親が日本人である者、または1つの国で（生まれ）育った者には、ナショナル・アイデンティティの交渉・再発見を促していた。このような傾向は、日本で生まれ育った後にニューヨークあるいはロンドンに移り住んだ「長期滞在者」「永住者」の若者を対象とした調査（藤田2007, 2008）でも、共通に見られたものである。

したがって、これらの調査結果に関して言えば、電子メディアの影響は限定的である。つまり、電子メディアは、複数の要因と関わりつつ、移住者が形成してきたもともとの感情・意識を補強したり促進したりするけれども、それを大きく変えるという効果はほとんど見られなかった。

最後に、以上の結論から導きだされた重要点を指摘したい。まず、先行研究では、トランスナショナルな移動や活動は一世に強いといわれてきた。しかし、トランスナショナル・アイデンティティについては、上記の筆者が実施した調査の結果に限れば、「新二世」の一部にのみ1つのネイションへの帰属意識を越えるような心情が見られた。したがって、トランスナショナルな意識については、むしろ「新二世」の間でより強い傾向がある可能性が示唆された。今後この点を慎重に検討していくべきだろう。

つぎに、本稿は、日本というネイションの場合においても、トランスナショナルな意識を抱く移住者は確実に存在していることを明らかにした。今後ますます国際移動が活発化し、ディアスポラ的な経験の高い「新二世」やそれ以降の世代が増加していくにつれ、電子メディアの影響の下、トランスナショナル・アイデンティティの創出がますます促される可能性があるだろう。現在、「日本人」というナショナルな共同体の境界にも、わずかではあるが確実に、「ポストナショナル」な秩序を志向する変化は現れ始めているのである。

## 参考文献

### <日本語文献>

- ベフハルミ編 2002年 『日系アメリカ人の歩みと現在』、京都：人文書院。
- 藤田結子 2004年 「グローバル化時代におけるエスニック・メディアの社会的機能」、『マス・コミュニケーション研究』64号、121-134頁。
- \_\_\_\_\_ 2007年 「国境を越えるメディアとナショナル・アイデンティティ」、『マス・コミュニケーション研究』70号、97-115頁。
- \_\_\_\_\_ 2008年 『文化移民——越境する日本の若者とメディア』、東京：新曜社。
- 外務省 2009年 『海外在留邦人数調査統計』。
- 小井戸彰宏 2005年 「グローバル化と越境的社会空間の編成」、『社会学評論』56号、381-399頁。
- 町村敬志 1999年 『越境者たちのロスアンジェルス』、東京：平凡社。
- 南川文理 2007a年 「エスニシティのトランス／ナショナルな条件」、慶應義塾大学第5回21COE - CCC国際シンポジウム報告書『多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成』。
- \_\_\_\_\_ 2007b年 「二つの『ジャパニーズ』」、『日系人の経験と国際移動』、京都：人文書院、27-49頁。

- 村井忠政 2007年 「アメリカ合衆国における移民研究の新動向」、村井編『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生』、東京：明石書店、17-41頁。
- 大井由紀 2007年 「トランスナショナリズムから何がみえるのか」、慶應義塾大学第5回 21COE - CCC国際シンポジウム報告書『多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成』。
- 桜井厚 2002年 『インタビューの社会学』、東京：せりか書房。
- 田辺俊介 2010年 『ナショナル・アイデンティティの国際比較』、東京：慶應義塾大学出版会。

#### <外国語文献>

- Aksoy, Asu and Kevin Robins 2000. "Thinking across Spaces: Transnational Television from Turkey", *European Journal of Cultural Studies*, Vol.3, pp.343-65.
- Anderson, Benedict 1983. *Imagined Communities*, London: Verso (=白石隆・白石さや訳 1997年『想像の共同体』、東京：NTT出版) .
- \_\_\_\_\_ 1992. "The New World Disorder", *New Left Review*, No.193, pp.3-13 (=関根政美訳 1993年「遠隔地ナショナリズムの出現」、『世界』586号) .
- Appadurai, Arjun 1996. *Modernity at Large*, Minneapolis, Minn.: University of Minnesota Press (=門田健一訳 2004年『さまよえる近代』、東京：平凡社) .
- Bailey, Olga G., Myria Georgiou, and Ramaswami Harindranath 2007. *Transnational Lives and the Media*, New York: Palgrave Macmillan.
- Basch, Linda G., Nina Glick Schiller, and Cristina Szanton Blanc 1994. *Nations Unbound*, New York: Gordon and Breach.
- De Block, Liesbeth and David Buckingham 2008. *Global Children, Global Media*, New York: Palgrave Macmillan.
- Fugita, Stephen and David J. O'Brien 1991. *Japanese American Ethnicity*, Seattle: University of Washington Press.
- Fujita, Yuiko 2009. *Cultural Migrants from Japan: Youth, Media, and Migration in New York and London*, Lanham, MD: Lexington Books.
- Georgiou, Myria 2006. *Diaspora, Identity, and the Media*, New York: Hampton Press.
- Giddens, Anthony 1990. *The Consequences of Modernity*, Cambridge: Polity (=佐和隆光訳 2001年『暴走する世界』、ダイヤモンド社) .
- Gupta, Akhil and James Ferguson 1997. "Beyond 'Culture': Space, Identity, and the Politics of Difference", in A. Gupta and J. Ferguson (eds.), *Culture, Power, Place*, Durham: Duke University Press.
- Hall, Stuart 1996. "Who Needs 'Identity'?", in S. Hall and P. Du Gay (eds.), *Questions of Cultural Identity*, London: Sage, pp. 4-10.
- Itoh, Keiko 2001. *The Japanese Community in Pre-War Britain*, London: Routledge Curzon.
- Karim, Karim H. 2003. *The Media of Diaspora*, London: Routledge.
- Kasinitz, Philip 2008. *Inheriting the City*, New York; Cambridge, Mass.: Russell Sage Foundation; Harvard University Press.
- Kim, Youna 2010. "Diasporic Nationalism and the Media", *International Journal of Cultural Studies*.
- King, Russell and Nancy Wood 2001. *Media and Migration*, London: Routledge.
- Kondo, Kaoruko 2005. *The Media and Japanese Children in Diaspora*, unpublished PhD thesis,

University of Westminster.

Kurotani, Sawa 2005. *Home Away from Home*, Durham: Duke University Press.

Leeuw, S. and R. Ingegerd 2007. "Diasporic Mediated Spaces", in Bailey, O., M. Georgiou, and R. Harindranath (eds.), *Transnational Lives and the Media*, New York: Palgrave Macmillan.

Levitt, Peggy and Mary C. Waters 2002. *The Changing Face of Home*, New York: Russell Sage Foundation.

Portes, Alejandro and Ruben G. Rumbaut 2001. *Legacies*, Berkeley: University of California Press; Russell Sage Foundation.

Robins, Kevin. and Asu Aksoy 2001. "From Space of Identity to Mental Spaces", *Journal of Ethnic and Migration Studies*, Vol.27, pp.685-711.

Sakai, Junko 2000. *Japanese Bankers in the City of London*, London: Routledge.

Takaki, Ronald 1989. *Strangers from a Different Shore*, Boston: Little, Brown and Company.

Vertovec, S. 2001. "Transnationalism and Identity", *Journal of Ethnic and Migration Studies*, Vol.27, pp.573-582.

Waters, Mary C. 1999. *Black Identities*, New York: Russell Sage Foundation.